

氏名 唐 利国
学位 博士(学術)
学位記番号 新大院博(学)第52号
学位授与の日付 平成18年 9月21日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
博士論文名

兵学者としての吉田松陰

論文審査委員 主査 教授 芳井研一
副査 教授 内藤俊彦
副査 教授 矢田俊文

博士論文の要旨

唐利国の学位論文「兵学者としての吉田松陰」は、これまで多くの研究業績がある吉田松陰について、とくに兵学者としての側面に注目して新たな成果を加えようとした意欲的な論文である。

本論文の構成は以下の通りである。

序章

第一章 吉田松陰の自己形成における家学修業

第一節 家学修業と松陰の自己認識の形成

第二節 吉田松陰の家学修業と九州遊学

第三節 兵学師範としての吉田松陰の現状認識と対策論—上書をめぐって—

第二章 吉田松陰の兵学的な主体性の確立—江戸遊学と東北遊歴を中心として—

第一節 江戸遊学

第二節 東北遊歴

第三章 吉田松陰の兵学の体系—安政2年から4年までを中心として—

第一節 「獄舎問答」

第二節 『講孟余話』

第三節 『武教全書講録』

終章 吉田松陰の兵学と直接行動論

本論文は、吉田松陰の思想と行動の展開過程に即して、四章にわけて検討している。まず問題としてとりあげられたのは、先行研究には松陰が身につけた伝統的兵学に内在する変革的な能力をきちんと位置付けていないという点である。そこで第一章では、とくに家学としての山鹿流兵学の持った意義をはっきりさせるなかで松陰の兵学を全面的に検討することを課題とし、松陰の自己形成における家学修業の意味を検討した。

第一節で家学修業の時代に松陰の学問の内容と学問上の特徴を確認し、第二節では松陰の九州遊学の意味を検討した。第三節では、松陰の上書を中心に、彼の家学修業時代に形成された思惟方式を検討した。先行研究では九州遊学によって松陰の思想が変化したことを重視しているが、家学修業の時代において彼が学んだ学問内容は山鹿流兵学を超え、他流派の兵学や海防論、西洋兵学などを柔軟かつ積極的に吸収するものとなっていたことこそが重要であるとした。このような知識を受けとめる姿勢が、彼の幕末の変動期における変革意識展開の前提となったことを綿密に考証した。

つぎに松陰にとって儒学と兵学とはいかなる関係があり、それぞれどのような位置を占めたかを検討する必要があると考えた。そこで第二章では、吉田松陰の江戸遊学と脱藩遊歴とりあげ、第一節で松陰の第一回江戸遊学を、第二節で、脱藩の形で実行された東北遊歴を検討した。松陰は江戸で広大な学問の世界を知って大きな衝撃を受け、「方寸錯乱」の末に兵学者として自己を明確に位置づけた。また江戸での他藩の人との交流によって強まった「天下意識」の一部分としての他藩の人に対する信義と「長州藩意識」に繋がっている長州人の名誉を守る意欲という二つの契機を通して脱藩の形で東北遊歴が行われたと位置づけた。その結果、伝統的な学問としての儒学と史学を基礎としつつ「太平の弊」を批判し、君主を中心とした改革論と士道による「自任」の論理を打ち立てるに至った点にとくに注目し、そのことが後に急進主義的な草莽論等を組み立てる際の前提となったという視点を打ち出したところに本章の特色がある。

第三章では、安政2年から4年までの時期における吉田松陰の兵学を、「獄舎問答」・『講孟余話』・『武教全書講録』という松陰の三つの作品を通して具体的に検討し、松陰の兵学の体系のなかに位置づけた。第一節の「獄舎問答」では民政論を論じ、第二節の『講孟余話』では性善論と国体論、第三節の『武教全書講録』では士道論を分析した。これらの著述のそれぞれについての豊富な先行研究は蓄積されているが、この三つの著作を松陰兵学の展開過程の中に厳密に位置づけながら検討するという作業は十分になされているとはいえず、そのため松陰独特の儒学を融合させた兵学論の特徴を正確にとらえることが出来なかった。本章において三つの著作を兵学書としての視点から検討した結果、松陰兵学はこの時点で儒学を不可欠の一環として組み込み、時局の変化に応じて内治優先・民心統一・国内協力を優先する必要をとなえていたこと、その結果功利に走るのではなく仁政と民政を本道とするために「有志の士」が政治活動を行うべきであるという結論を得たのであり、その総体を松陰の兵学論のなかに位置づけることが必要であるとした。

いての通説は、「要駕策」という直接行動計画が彼の死地論に根ざしていたとしている。しかし幕末の危機状況の展開過程に即して松陰の議論を微視的に追うと、彼は道德によって軍事行動を指導すべきだと主張しつつ、他方で情勢の変化に的確に応じて断固たる行動をとるべきだとしており、兵学者としての危機意識が鮮明であった。さらに松陰はこの段階でも「利害」ではなく「大義名分」を優先する行動をとったが、それは家学修業時代以来つちかわれてきた兵学者としての素養のなせるものであり、通説のように死地論として位置づけられるものではないとした。

審査結果の要旨

本論文は、奈良本辰也氏や橋川文三氏、松本三之介氏、近年では前田勉氏などの豊かな先行研究を踏まえつつ、とくに兵学者の側面に焦点をあてて吉田松陰の思想と行動の展開過程を考察したものである。

本論文で評価できる主な点は、次の通りである。

松陰思想の展開における兵学の役割に言及した先行研究は、伝統的兵学に対する批判、世界情勢への開眼、あるいは新時代の兵学である西洋兵学への転換などに焦点を当てる傾向にあった。それに対して本論文は松陰の家学修業時代について詳細に検討した結果、彼の知識に対する開放的な態度が最も重要な点で、山鹿流兵学・他流兵学・海防論・西洋兵学などの知識を積極的に吸収したことが、彼の変革意識の展開の前提となったことを解明した点について高く評価できる。

また松陰はペリー来航の後西洋兵学を研究することの重要性を十分に認識したものの、それを兵学者として究めることを選ばなかったことに注目し、結局彼が西洋兵学を唱えたのは、新たな兵器と兵種を取り入れたり、敵情を知ったりするためであったことを検証して、通説を補正する論点を提示したことは評価できる。

さらに松陰の兵学が、「理」は不変で、「理」にしたがって状況の変化に対応できる戦闘方法を考えるべきだと主張し、それを政治領域に適用して「旧」はもとより随時変化の中に存在するものであり、時勢に応じて変化することができなければ、かえって「旧」の「実」を失ってしまうと考えていたことを重視し、この点が幕末動乱の時代に彼をして抜本的な改革を追求する前提になったことを明らかにしたことは評価できる。

総じて従来の研究は、一方では家学としての山鹿兵学や西洋兵学の影響を実態以上に重視し、他方急進主義論については死地論から解釈する傾向が強かったのに対し、松陰の思想と行動の展開過程をたんねんに検討することにより、兵学者としての松陰を新たな側面から照射した研究として評価できる。

本審査委員会は、これらの評価にもとづいて、本論文が博士号の請求論文として十分な内容を持っていると認定した。